

## 審査の結果の要旨

氏名 君嶋亜紀

本論文は、中世和歌史のうち、二つの大きな画期である新古今時代と南北朝時代について、それぞれの時代の主要な歌集・歌人・歌論の表現の分析を試みたものである。最初に序章において本論文の方法と観点、研究史的課題について述べた後、全体をⅠ「新古今時代の本歌取り諸相」とⅡ「南朝和歌試論」に分け、それぞれを五つの章とまとめとなる終章の六章から構成する。

Ⅰでは、新古今集時代の和歌表現について、本歌取りを中心に論じる。『新古今集』春下巻頭の後鳥羽院歌に、理想的な君臣の姿を描き出す方法を看取り、従来の美学的なものとは異なる、新たな本歌取り観を提議する(第一章)。藤原良経の初期百首「花月百首」の西行歌の本歌取りに、西行を視点人物とする物語を生み出すかのような姿勢を指摘する(第二章)。藤原良経の家集『秋篠月清集』の本歌取りの方法を丁寧に分析して、その方法の分類を試み(第三章)、藤原定家の真作かどうかで大きな議論のある『毎月抄』について、その本歌取り説が定家息為家の指導を受けた歌人が活躍する時代にふさわしいものであることを指摘する。これによって、本歌取り説の史的展開に新たな展望を与えると同時に、『毎月抄』真偽論争にも一石を投じることとなった(第四章)。本歌取りだけでなく、物語取りについても論が展開され、中世前期の哀傷歌における『源氏物語』摂取の変化を通観する。その変化を捉える際「共感」と「違和感」という視点を置いたのは、卓抜な着想であった(第五章)。終章では、後鳥羽院の隠岐配流詠「遠島百首」を、伝統的表現と現実的感情という点から問題を整理し、Ⅱへと関連させている。

Ⅱは、南北朝時代の和歌の分析であり、とくに勅撰集に准じられる『新葉集』の考察を中心とする。同集雑部に見られる中世的歌語「あらまし」をめぐる、それを含む歌の配列が、都への帰還を願う南朝の現実を浮かび上がらせるよう意図されていると解析し(第一章)、また同集春下巻頭部分に見出される後醍醐天皇歌の「雲居の桜」について、そこに正当な帝王であるとの意識を認めたいうで、これを配列した宗良親王の、過去を幻視する意図を見出す(第二章)。ついで春下の宮中の桜の歌群に端を発して、『新葉集』の「都」には京都を指す場合と吉野・行宮との分裂が見られ、それが同集の勅撰集としての根源的な矛盾である、との指摘を行う(第三章)。一方その矛盾は同集羈旅部にも見られることを、多面的に分析している。とくに宗良親王が自詠を読人不知として入集させていることの考察が新視点である(第四章)。第六章は南朝の説話集『吉野拾遺』についてで、後代の偽作であることを認めつつ、享受史的視点から見直そうとしている。最後に南朝和歌の「都」の変遷をたどりながら、それに二義が存することを明らかにし、まとめとしている(終章)。

本論文は、中世和歌の重要な転換点である、新古今時代と南北朝時代の和歌について、様式化していく和歌的表現と現実との相克という、本質をついた問題意識を基に精密な分析を行ったもので、多くの新見を盛り込んでいる。藤原定家や北朝の和歌の分析を深めるべきなど、今後の課題もなお存するが、本審査委員会は、上記のような研究成果に鑑み、本論文が博士(文学)の学位に相当するものとの結論に至った。